

## 序論：現代ヘブライ語文化と言語

アダ・タガー・コヘン

ヘブライ語は、長い歴史の中でユダヤ人のアイデンティティの一部であった。そしてこの言語によって自分たちの文化の知を表現し、儀礼を実行し、自分たちの歴史的経験を口伝や成文のテキストで保存してきた。150年前からヘブライ語は、文化と文学の高級な言語という役割を維持しながら、日常の言語として再出現した。ヘブライ語は、その起源は何千年も前の聖書時代にあるが、イスラエル国家の中で、またその他の場所でも、ユダヤ人にとっても非ユダヤ人にとっても、現代文化の表現手段となった。

ウェブで「ヘブライ文化」を検索すると興味深い点が明らかになる。2013年に2つの国際会議が開催されている。オーストラリアとインドにおける、「ヘブライ言語と文化」、あるいは単に「ヘブライ文化」をテーマとした会議である。ここでは「ユダヤ文化」というタイトルは使われていない。しかしながら、過去の言及に目を通すと、「ヘブライ」という語はたいてい「古代ヘブライ語」もしくは「現代ヘブライ語」と結び付けて用いられており、一方「文化」という言葉はしばしば「ユダヤ文化」との結び付きで用いられている。こうした情報は、最近の文化研究の一環として、かつて宗教研究の概念と方法論に強く結び付いていた「ユダヤ文化」という用語ではなく、「ヘブライ文化」という概念が登場していることを示唆している。勿論、ユダヤ人は時代を通じて宗教的集団であったことは否定できない。しかし、同時に一つの民族集団として見なされていたし、それゆえ離散状況の歴史の中で、彼らの非宗教文化的要素—詩文や文学—を維持してきたのであり<sup>1)</sup>、こうした要素はユダヤ人が19世紀以降、ヨーロッパ諸国で一旦解放されるや否や、更に増大したのである。

ヨーロッパでのユダヤ人の解放は、キリスト教社会の「彼らは文化と国家的同化を完全に達成すべき」という要求とともに進化した<sup>2)</sup>。あるユダヤ人はこの要求を受け入れ、程度は様々であるが、同化した。しかしまた、ある者は、解放は彼らに国家の復興と現代化をもたらす機会だと理解した。こうした近代ユダヤ知識人の中では、彼らもまた世俗派であるが、ユダヤ文化は、ヘブライ語でなされるべきか、あるいは別の言語によるべきかという問題について議論になった。この問題については様々な答えが出されたが、ヘブライ文化という強大な潮流は、新聞や雑誌、翻訳や独自の文化の出版によって発展し、顕現した。ヘブライ語で書くことは、世俗ユダヤ文化の表現形態として完全なものになり、やがて日々の生活で用いられる日常言語となったのである。

「ヘブライ文化」という時、ユダヤ人の時代的情況、地理的情況に応じてトピックを分ける必要がある。しかしその概念は、20世紀、21世紀のシオニズムの発展と成長の一部として展開した現代ヘブライ文化には最も適用しやすいと思われる<sup>3)</sup>。

デヴィッド・ビアレが編纂した『ユダヤ人の文化』という近著では、異なる文化に対する文化的変容、適合、同化の長い歴史の結果生まれ、現代の国民国家の進展によって変化している「現代ユダヤ文化」を9本のエッセイが記述している<sup>4)</sup>。最初の章では西欧、東欧とオスマン帝国内での変容が記述され、次に北アフリカと中東のアラブ諸国、そしてイスラエルの「オリエンタル」ユダヤ人（ミズラヒーム）とその文化的離別と受容に焦点を当てられ、最後にアメリカのユダヤ文化で締めくくられている。これらのコミュニティの現代でのそれぞれの文化状況について、様々な著者が詳細を記述している。ユダヤ人の最近の文化、おもにイスラエルと北アメリカについては、それらが2つの極を軸として構築されていることが特徴である。1つは、宗教的なアイデンティティと結び付いた長く歴史的なユダヤ人の遺産であり、もう1つは、自由で独立した世俗的なユダヤ人の生活である。ビアレが記述しているように、これは「永遠の周期の、最近の局面に過ぎないかもしれない…そしてユダヤ人の文化史における永遠のテーマである」<sup>5)</sup>。

同志社大学での会議においては、ヘブライ文化に強調点を置きつつ、歴史的視座から、そして、国際的にも評価の高い小説家であり批評家であり、本会議の基調講演を行った A. B. イエホシュア氏によって、またイスラエルと日本の研究者らによって現代ユダヤ文化が描かれた。会議で発表された各発表の概要は以下の通りである。本誌上では、テーマと発表言語によってペーパーは4部に分けた。第I部、第III部、第IV部が英語で、第II部は日本語である。

## 会議での発表要旨

会議の前夜祭として特別セッションをもうけた。そこでは、三宅良美教授がイスラエル映画について発表された。今日、イスラエル映画は国際的に、また日本でも認知されるようになり、国際映画賞の候補にも上るようになって、実際に受賞もしている。このようなイスラエル映画製作の現状とその主要なテーマについて発表された（発表論文は第II部に収録）。

三宅教授の発表に続き、小説家 A. B. イエホシュア氏の近作を原作とした映画、*The Human Resources Manager*（エラン・リクリス監督 2010年）が上映された。エルサレムのパン工場の人事部長が、エルサレムの市場の自爆テロで犠牲になった自社の外国人労

働者（新聞記者が告発するまで、その遺体は放置されていた）の死に向かい合う様と同時に、自身の人間性を回復していく過程を描いている。上映後、イエホシユア氏は、本書執筆に至った経歴、また映画についての彼自身の感想についての質問に答えた。そして、老若男女を問わず、一般市民を殺害した自爆テロが頻発していた困難な時期のイスラエル社会を描くという著者の意図を聴衆に明らかにした。そのような困難な時期にあっても、寄留者（ヘブライ語でゲール）を聖書の教えに従って、「あなた方自身のように」道徳的に扱うことを忘れてはならないということをユダヤ社会に訴えたかったという<sup>6)</sup>。また映画は、原作から多少離れた点はあるにせよ、その重要性は評価できると語った。

2日目、3日目には、イエホシユア氏とニツァ・ベン＝ドヴ教授による公開講演会が開催された。ともに、歴史的観点から現代ヘブライ文学を語った（第Ⅰ部に収録）。イエホシユア氏は、長い過程を経て形成されたイスラエル人のアイデンティティについて語った。それは、抜本的な変化を求められている。つまり、「神話」よりも、ディアスポラのユダヤ人がそうであったように、自分自身の国民としての生活に責任を持ちながら、「歴史」に依拠すべきであるということである。イエホシユア氏は、いくつかの例を挙げて、この目標を達成することがいかに困難かを説明した。講演の後半部分では、文学と芸術が歴史への回帰の実現に参加できる方法について、自身の小説、『2000年の終わりへの旅程』の執筆を挙げて語った。

ニツァ・ベン＝ドヴ教授の公開講演会では、ヘブライ語を軸に、彷徨えるヘブライ人であるアブラハムを筆頭に、ユダヤ人のディアスポラでの放浪の歴史を旅した。その中で、彼女は、放浪と移動に力点を置きながら、ヘブライ語とユダヤ人の歴史の深い結びつきについて論じた。そして、現代ヘブライ語文学者の例として、巨匠 S. Y. アグノンから現代イスラエル作家に至るまで例に挙げながら解説した。また、ヘブライ文学が世界中の文化の中で認識されてきていることを語った。

これら2つの公開講演会に加えて3つの研究会が開催された。そのうち2つは英語でなされ（第Ⅲ部、第Ⅳ部）、1つは日本語であった（第Ⅱ部）。日本語では「日本におけるヘブライ文学とユダヤ学」というテーマのもと、現在の日本のユダヤ学と特に現代ヘブライ文学の様々な潮流についての発題が行われた。

高尾千津子教授は、19世紀ロシアにおけるヘブライ語の使用の詳細について発表された。アブラハム・マプー、モシェ・リリエンブルムらの活動を紹介し、特に、リリエンブルムも居住した多言語都市オデッサが当時のヘブライ文学活動の拠点となったことを指摘している。しかし、1917年の革命以降、ブンドを中心とするイディッシュ語主義による弾圧により、オデッサにおけるヘブライ文学創作活動は終焉を迎える。ヘブライ作

家のシオニズム活動の中心は、時代を牽引した詩人ハイム・ナフマン・ピアリクを含む12人のヘブライ語作家のヤッフォ移住によって、パレスティナに移った。

赤尾光春氏の発表は、近代ユダヤ文学のユートピア小説の中から様々な例を挙げ、それらの作品に共通する特徴として「他者の不在」を指摘している。赤尾氏は、ヘブライ語だけでなく、様々な言語の作品を批判的に検証している。19世紀のエドモンド・アイズラー、エルハナン・レヴィンスキーを皮切りに、政治的シオニズムの創始者であるテオドール・ヘルツェル、そして現在のイスラエルの首相、ベンヤミン・ナタニヤフの演説にまで及ぶ。

細田和江氏は、アラブ・イスラエル人作家の作品を読解し、言語とアイデンティティの問題を検討した。1948年イスラエル国家成立後に生じた、イスラエル・アラブという少数派の作品を、イスラム教徒、キリスト教徒のものも含めて概観した上で、精力的に作品を発表している人気作家、サイイド・カシューアの作品を分析している。カシューアは、このマイノリティの、特にその若年層の複雑な社会政治的な状況を、他のイスラエル人の意識に上らせようとしている。

英語での研究会は、2つのテーマに焦点が当てられた。1つは小説家とその読者、批評家との関係をさぐるもので（第Ⅲ部）、もう1つは、日本語からヘブライ語への翻訳にまつわる問題を扱い、2つの遠く離れた言語の間で生じる一般傾向と特殊問題について論じられた（第Ⅳ部）。

最初の研究会では、イエホシュア氏は、現代イスラエルでの作家の位置についてと、社会、政治的領域においていかに作家が自分の見解を表現することを期待されているかについて論じた。彼の発表の要点を押さえたヘブライ語の論文は、勝又直也、悦子の両氏によって翻訳され、本誌に収録されている（第Ⅱ部）。

ニツァ・ベン＝ドヴ教授は、彼女が公開講演会で論じた小説家について、彼女と小説家との関係の個人的な見解を提示した。S. Y. アグノンから始まり、イエホシュア、アモス・オズ、ハイム・ベア他である。

村田靖子教授はイエホシュア氏の小説『マル・マニ』について新たな解釈を提示した。この小説は、著者を主人公に重ねてそのセファルディックなルーツを見つめようとする伝記的な試みであり、シオニストの歴史に新しい見地を提供しようとしているという。そして本書の三つの主要なテーマを明らかにした。年代の逆転、アケダー（イサク供犠）、そして主人公としてのエルサレムである。これらを通して著者は、「歴史と文化」の解釈を創造しようとしているという。

第Ⅱ部では、翻訳についての2本の発表があった。ドロニ・B. コヘン氏は、過去70年の日本文学のヘブライ語への翻訳を概観するとともに、いくつかの個別のエピソード

に注目して、翻訳者と出版社の作品に伺えるいくつかの傾向を明らかにし、日本文学がイスラエルの読者の間で、この20年間高い人気を博していることを指摘した。また、逆方向の翻訳、つまり、ヘブライ語から日本語への翻訳についても概観した。その結果、日本とイスラエルの関心の違いが明らかにされた。日本のイスラエルについての関心は文学よりも政治的なものに対してより強いことが指摘された。

ミハル（ミキ）・ダリオット・ブル氏は、日本文学のヘブライ語への翻訳者としての彼女自身の経験から、また彼女の同僚の経験から様々な例を挙げてくれた。彼女は、微妙なニュアンスがいかに翻訳の過程で失われるかを指摘し、オリジナルテキストの豊かさに読者を近づけるための方法を論じた。

本会議での発表は、ヘブライ文化への様々なアプローチとユダヤ学の様々な潮流を紹介するものであった。本会議に集ったイスラエル人、日本人研究者は、聴衆、学生、研究者に対して、それぞれの立場からの見解を提示した。それは、必ずしも一致をみるものではないし、また CISMOR の見解を代表するものではない。しかし、様々な見解を展開させることもユダヤ教、ユダヤ学の在り方である。本会議で論じたヘブライ文化と日本文化というテーマが更に一層認知されるだけでなく、アジア大陸の両極で育った2つの文化の交流がますます密になることを願ってやまない。

---

## 注

- 1) Eliezer Schweid, *The Idea of Modern Jewish Culture* (Accademic Studies Press, Boston, 2010), p. 16, and the chapter on “The Secular Jewish Culture of Yiddish,” pp. 237-240.
- 2) Eliezer Schweid, *ibid.*, p. 15.
- 3) エリエゼル・ジュベイドは上掲書で更に詳細に歴史的見取り図を叙述している。
- 4) Daid Biale (ed.), *Cultures of the Jews vol.3: Modern Encounters* (Schocken Books; NY, 2002).
- 5) Biale, *ibid.*, p. xvi.
- 6) ヘブライ語の原題は、2004 (הוצאת הספרייה החדשה) א.ב. יהושע, שליחותו של הממונה על משאבי אנוש (英訳は、A. B. Yehoshua, *A Woman in Jerusalem* (translated by Hillel Halkin; Mariner Books, 2007)。

## **Introduction: Modern Hebrew Culture and Language**

**Ada Taggar-Cohen**

The Hebrew Language was part of the identity of the Jews throughout their long history, and in that language they expressed their cultural wisdom, performed rituals and preserved their historical experience through oral exchanges and written texts. Over the past 150 years Hebrew has reemerged as an everyday language, while maintaining its role as the language of high culture and literature. Hebrew is the vehicle of modern culture for Jews and non-Jews in the State of Israel and elsewhere, with its deep roots going back through millennia to biblical times.

A Web search for the combination “Hebrew Culture” reveals an interesting point: two international conferences were held in February 2013—one in Australia and the other in India—on the theme of “Hebrew Language and Culture,” or just “Hebrew Culture”. The term “Jewish Culture” was not used in these cases. However, looking through older references we see that the word “Hebrew” was used mostly in the combinations “Ancient Hebrew” or “Modern Hebrew”, while the word “culture” was often used in the combination “Jewish Culture”. These findings seem to indicate the recent emergence of the concept of “Hebrew Culture” as part of Cultural Studies, rather than the previous usage of “Jewish Culture”, which strongly related to the concepts and methodologies of Religious Studies. One, of course, cannot deny the fact that the Jews were a religious group through the ages, but they were also clearly identified as an ethnic group and thus maintained throughout their history of Diaspora existence non-religious cultural components<sup>1)</sup>—such as poetry and literature—which increased once Jews were emancipated in some European countries from the 19<sup>th</sup> century onward.

The emancipation of European Jews went together with the demand from Christian society that they should “achieve complete cultural and national assimilation.”<sup>2)</sup> Some Jews accepted this demand and adopted various degrees of assimilation, but other regarded emancipation as an opportunity that would lead to national revival and modernization. Some of those modern Jewish intellectuals, who were often also secular, debated the question whether Jewish Culture should be conducted in Hebrew or in other languages. Although different answers were given to this question, a strong stream of Hebrew culture developed and manifested itself in the publication of newspapers, periodicals, translations and original literature. Writing in Hebrew became a natural mode of expression for secular Jewish culture, and it soon became also a living language in daily use.

When speaking of “Hebrew Culture,” one has to divide the topic into periods of Jewish existence,

as well as geographical existence, but this term seems most applicable to Modern Hebrew Culture developed during the 20<sup>th</sup> into the 21<sup>st</sup> centuries as part of the development and growth of Zionism.<sup>3)</sup>

In a recent volume edited by David Biale and titled *Cultures of the Jews* nine essays describe the world of “modern Jewish cultures,” as a result of long history of acculturation, adjustments or assimilation to different cultures starting with the changes resulting from the evolvement of the modern nation-states.<sup>4)</sup> The first chapters in this volume describe the transformations in Western and Eastern Europe and the Ottoman empire; they continue with Arab countries in North Africa and the Middle East, focusing on Israel’s “Oriental” Jews (*Mizrachim*) and their cultural estrangement and acceptance, and finish with American Jewish culture; the different authors give a detailed description of the cultural state of each of those communities in the modern era. The cultures of the Jews in recent times, mainly in Israel and North America, can be defined by the fact that they were built around two poles: on the one hand a long historical Jewish legacy bound by religious identity, and on the other a free independent life of secular Jewish existence. As Biale writes, this may be “only the latest phase in an eternal cycle [...] an enduring theme in the cultural history of the Jews.”<sup>5)</sup>

The conference at Doshisha University tried to present Modern Jewish culture—with an emphasis on Hebrew culture—as it can be seen in historical perspective, and the way it is portrayed today by the internationally acclaimed Israeli novelist and essayist A. B. Yehoshua, who was our keynote speaker, as well as by scholars from Israel and Japan. Following is a short abstract of the papers presented at the conference. In this volume the papers are divided into four parts, according to the topics and language in which they were presented. Parts one, three, and four are in English and part two is in Japanese.

### **A summary of the conference papers**

As a prelude to our conference we started with a special session that included a paper by Prof. Yoshimi Miyake on Israeli films. She started by noting the fact that in recent years Israeli films have been well accepted internationally, and even in Japan, and were nominated for important international prizes, some of which were even granted to several of them. She described the production of Israeli films and the main themes with which they are concerned (her paper is included in Part II).

The paper was followed by the screening of a film based on a recent novel by A.B. Yehoshua, *The Human Resources Manager*, a 2010 Israeli drama film directed by Eran Riklis. It concerns the way in which a manager of human resources in a Jerusalem bakery reacts to the death of a foreign worker who was killed in a suicide bomb attack in a Jerusalem market, and the fact that no

## Introduction

one comes to identify the body until a journalist gets involved in the case. The story reveals the gradual change in the manager's sensitivity in treating the case. Following the screening A. B. Yehoshua answered questions regarding his decision to write the book, and his reactions to the film. As the author clarified to the audience, he attempted to address Israeli society in such difficult times of suicide bombing that have killed many adults and children in Israel. He wanted to point out to the Jewish society, that they should not forget the biblical moral demands of treating the alien resident (Hebrew *ger*) "as yourselves", even in hard times.<sup>6</sup> He believes the film is important even though the script deviates from the novel somewhat.

On the second and third days we had two public lectures: one by A. B. Yehoshua and the other by Prof. Nitza Ben-Dov, both offering a historical perspective on Modern Hebrew literature (their papers are in Part I). A. B. Yehoshua spoke on Israeli identity being shaped in a long process which required a profound change: rather than being based on mythology, as the identity of Jews in the Diaspora has been, it must be based on history, taking responsibility for their own national life. Yehoshua demonstrated his argument with several examples and explained the difficulties in reaching this goal. In the second part of his talk Yehoshua spoke about the writing of his own novel, *A Journey to the End of the Millennium*, as an illustration to the way in which literature and art can also take part in the realization of a return to history.

Prof. Nitza Ben-Dov's public lecture offered a journey with the Hebrew language through the history of the wanderings of the Jews in the diaspora, beginning with the first wandering Hebrew, Abraham. She demonstrated the deep relationship between Hebrew language and Jewish history, with an emphasis on wandering and movement, which she then illustrated with examples from Modern Hebrew literature, from the great master S. Y. Agnon to contemporary Israeli writers. She also spoke of the growing awareness of Hebrew literature and culture throughout the world.

Apart from these two public lectures we held three workshops: two were conducted in English (Parts III and IV), and one in Japanese (Part II). Three papers were delivered in Japanese under the title *Hebrew Literature and Jewish Studies in Japan*, representing different trends in the current Japanese scholarship in Jewish Studies generally and Modern Hebrew literature specifically.

The first paper, delivered by Prof. Cizuko Takao, presented details of the use of Hebrew language in Russia in the late 19<sup>th</sup> century. She stressed the activity of Avraham Mapu and especially Moshe Leib Lilienblum as the heart of Hebrew writing in Odessa, which being a multilingual city, opened its doors also to Hebrew, and the new Zionist movement was to flourish there. After reaching a pick in its use, Hebrew was suppressed after the 1917 revolution, and the Jewish community by the influence of the Bund group, moved to using Yiddish, and it lost its



Hebrew vitality. The center for Zionist activity of Hebrew writers moved to Palestine with the immigration of 12 Hebrew writers, including the leading poet Hayim Nachman Bialik.

Dr. Mitsuharu Akao's paper examined various examples of the utopia novel genre in the Modern Jewish literature critically, and pointed out the "absence of others" which he finds to be common to all of them. The writers whose work he examined wrote in various languages and not only in Hebrew, beginning with 19<sup>th</sup> century Edmund Eisler and Elchanan Lewinsky, through the founder of political Zionism Theodor Herzl, and up to current Israeli prime minister Benjamin Netanyahu, among others.

Dr. Kazue Hosoda took a detailed look at the writings of Arab Israeli writers, examining the problem of language and identity. Her paper surveys the work in Hebrew language of the minority Israeli-Arabs, both Muslims and Christians, since the establishment of the State of Israel in 1948. She concluded with the most prolific and popular writer Sayyed Kashua, who tries to bring the complicated socio-political situation of this minority, and mostly of its younger generation, to the awareness of other Israelis.

The workshops in English focused on two themes: the one looked at the relations between the novelist and his public and critics (Part III), while the other revolved around translations from Japanese into Hebrew, presenting general trends and specific difficulties in translation between these two distant languages (Part IV).

In the first workshop A.B. Yehoshua presented his understanding of the position of the writer in modern Israel and how it is expected of him to express his views in the social and political arena. The main arguments in his talk were published previously in an article in Hebrew, which was translated into Japanese by Naoya and Etsuko Katsumata especially for this conference and is also included in this volume (Part II). Prof. Nitza Ben-Dov gave a personal perspective of her relationships with the novelists about whose novels she wrote her academic studies, starting with S. Y. Agnon and continuing with A. B. Yehoshua, Amos Oz, Hayim Beer and others. Prof. Yasuko Murata presented a new interpretation of one of the major novels by A. B. Yehoshua, titled *Mar Mani*. She suggests seeing in this novel an autobiographical attempt on behalf of the author to look at his Sephardic roots and to offer a different perspective of Zionist history. The paper presents three major themes in the book—reverse chronology, the 'Akeda theme, and Jerusalem as a main protagonist—through which the author created his interpretation of "history and culture".

The second session included two papers on translation. Dr. Doron B. Cohen presented a survey of the translations of Japanese literature into Hebrew in the past 70 years, focusing on specific episodes and identifying some general trends in the work of translators and publishers, pointing

## Introduction

out the mounting popularity of this literature among the Israeli reading public in the past two decades. He also added a shorter review of translation in the opposite direction, from Hebrew into Japanese, the results of which indicate different concerns in Japan from those in Israel, with Japanese interest in Israel being more political than literary.

Dr. Michal (Miki) Daliot-Bul presented various examples from her own experience as a translator of Japanese literature into Hebrew, as well as that of her colleagues. She demonstrated how subtle points necessarily get lost in translation, and pointed out ways for keeping the reader as close as possible to the ambience of the original text.

In summary we can say that the papers presented in this conference introduced various approaches to Hebrew Culture and various trends in Jewish Studies. The conference brought together Israeli and Japanese scholars, who presented their respective perspectives to the general public, to the students and to their colleagues. Our hope is that this conference served not only to increase awareness of this theme, but also brought closer together two cultures thriving at the two extremes of the Asian continent.

---

## Notes

- 1) Eliezer Schweid, *The Idea of Modern Jewish Culture* (Accademic Studies Press, Boston, 2010), p. 16, and the chapter on “The Secular Jewish Culture of Yiddish,” pp. 237–240.
- 2) Eliezer Schweid, *ibid.*, p. 15.
- 3) Eliezer Schweid gives a detailed historical picture in his above-mentioned book.
- 4) Daid Biale (ed.), *Cultures of the Jews vol.3: Modern Encounters* (Schocken Books; NY, 2002).
- 5) Biale, *ibid.*, p. xvi.
- 6) The book appeared in Hebrew as: 2004 (הוצאת הספרייה החדשה) א.ב. יהושע, שליחותו של הממונה על משאבי אנוש (הוצאת הספרייה החדשה) and has later appeared in English as: A. B. Yehoshua, *A Woman in Jerusalem* (translated by Hillel Halkin; Mariner Books, 2007).